

## 2004年度1学年国語 1学期中間考査

この問題用紙は「ファイル」に「ど」じて保存すること。（とじていない場合はファイル提出不合格となる。）  
 字は丁寧に濃く書くこと。極端なくせ字、汚い字、読みとれない字の場合は減点の対象になる。  
 文章を書くときには句読点「。」や「、」を絶対に忘れないこと。ついてない場合は減点の対象になる。  
 全ての解答は解答用紙の決められた解答欄に記すこと。

次の文章について後の問いに答えなさい。

書店へ行き、ぎっしりと（エ）ツめ込まれている（シ）タナを見渡すと、情報、ポイント、知識、事典、ガイド、読み方、などといった（フ）ヒョウダイを持った本の多いことに、あらためて驚かされる。それは（ニ）あたかも、この世の中には人が知っておかなければならない「情報」とやらが無数にあり、身につけることができないと時代に取り残されるぞ、と書物たちが（ハ）声高に叫んでいるような光景に映る。この本を読まないで現代を生き抜いていくことはできないぞ、と。しかし、私は棚を前にただ（ミ）ボウゼンとするばかりで、どうしてもその種の本を（ミ）ボウダイに買い込み、そこに盛られた「情報」をそのまま飲み込み（ミ）胃の腑に納めようという気持ちにはならないのだ。

人と話していて、どうしてあなたはそんなに世の中の動きに（サ）ウトいのですか、とびつくりされることがある。世界の情報、政局の動向、景気の変化といったものはもちろんのこと、事件、ゴシップ、事故、流行などといったあらゆることに、私はかなりウトいほうであるらしいのだ。そのような話題が出るたびに、そういうええそんなことがあったような気がする、という程度の反応しかできない。しまいに、それでよくルポライターなどという職業が務まりますね、と半ばあきれたような声を出されてしまう。確かに、あきれたとしてもしかたがないくらい、私は「情報」というものに対して（ミ）怠惰な態度をとり続けている。

普段の私は、本ばかりでなく、新聞も、週刊誌も、月刊誌も、テレビも、ラジオも、ぼんやりと見聞きしているだけだ。そこには、情報収集に賭けるジャーナリストの（シ）ドンヨクさなどカケラもない。話をして、ルポライターである私にさまざまな世界の知られざる（シ）内幕といったものを聞こうとしていた人たちは（ミ）一様に失望する。とにかく私は何も知らないのだ。

しかし、それでよくルポライターが務まりますねと言われれば、それが面白いことに務まるんですよ、と別に開き直りからではなく答えることができる。ルポライタージュを書くという作業に、その種の「情報」が（ニ）必須のものであるとは思えないからだ。いや、邪魔であると思えるからだ。

大学時代、私はほとんど雑誌を買ったことがなかった。収入といえばアルバイトによるしかなかった私には金も惜しかったが、それ以上に時間が惜しかった。一か月もすれば泡のように消えてしまう活字に付き合っている暇はないような気がした。もしそれが本当に読むに値するものなら、きっと本になるだろう。それからでも遅くない。読みたい本は無数にあるのだから……。当時の私には、雑誌の中からあふれ出てくる「これが現代だ」といった調子の絶叫が、単に（ミ）時代の表皮を軽薄になぞっただけのものと感じられたのだらう。

私は大学を卒業してすぐ、思いがけずルポルタージュを書くようになったが、雑誌嫌いの当然の帰結として、現代的な風俗や流行というものにきわめてウトかった。ジャーナリストイックな知識や（ミ）勘に欠けて

いた。私は、自分が取材しようと思う対象について、

一般に（シ）流布されている程度のことすらも知らなかった。だから、いつでもゼ口に近いところから出発し、一つ一つ知っていったのだ。知ることで、驚いたり、喜んだり、打ちのめされたり、感動したりしながら理解していったのだ。

しかし、知らないということは決して悪いことではなかった。自分が知っていないということを正確に知っているからだ。恐ろしいのは、むしろ中途半端に知っていることであり、それですべてを知り尽くしていると（ミ）サツカクすることである。私のルポルタージュに一点でも長所があったとすれば、それは自分が何も知らないということをよく知っていたという点にあったのかも知れない。

習慣とは怖いもので、今でも雑誌を買おうとする（ニ）手（ミ）鈍（ミ）つてしまう。自分自身が雑誌に文章を書くことで収入を得ているにもかかわらず、やはりもったいないと思ってしまうのだ。もつとも、今では本にならない活字が読むに値しないとは思っていないが、かりに価値があったとしても、雑然とした「情報」の洪水に追い立てられ、おぼれるのは（ミ）メンだという気持ちがある。

大事なことは最初にどれだけ知っているかではない。知するためにはどうしたらよいかを知っていることであり、さらに大切なことは、知ること（ミ）驚（ミ）き、喜（ミ）び、打（ミ）ちのめ（ミ）され、場（ミ）戸（ミ）よ（ミ）うては感動する（ミ）といふ（ニ）心の柔らかさを持つていることだ。本当に知りたいことに、柔らかく反応できる自分を作ることだ。そして、そのような自分は、決して「情報」では作りえないものなのだ、と私は思う。

問一、——部（ミ）（ミ）の漢字はその読み仮名をひらがなで、カタカナはそれを漢字に直して記しなさい。

問二、——部（ミ）（ミ）の語を別の言葉や単語を使って、もとの文章表現の意味が変わらないようにして言い換えなさい。

問三、次の文章のうち、「情報の洪水におぼれている」ものには「A」と、「情報の洪水におぼれていない」ものには「B」と記しなさい。

この世の中には人が知っておかなければならない「情報」が無数にあり、身につけることができないと時代に取り残されると思っていること。

「情報」というものに対して怠惰な態度をとり続けていること。

中途半端に知っていてそれで全てを知り尽くしていると錯覚すること。

自分が何も知らないということをよく知っていること。

情報を知るためにはどうしたらよいかを知っていること。

情報を知ることによって驚き、喜び、打ちのめされ、場合によっては感動すること。

次の問に答えなさい。

問一、古文では語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「ワ・イ・ウ・エ・オ」と発音する。それでは次の語はどのように発音するか、カタカナで記しなさい。なお、参考として（ ）に、その語を漢字に直したものを表記しておく。

たはぶる（戯ぶる）      つかはす（遣はす）

いふ（言ふ）      ふみ（文）

つはもの（兵）      かたはら（傍）

はつはな（初花）

問二、古文では長音の表記が現代と異なっている。次の古文はどのように発音するか、カタカナで記しなさい。

かかるやうやはある      おくびやう

けふ      ひさしう      やう

問三、五十音表のヤ行とワ行をひらがな・カタカナで記しなさい。

問四、いろは歌の次の条件に当てはまる箇所をそれぞれ記しなさい。

「わかよたれそ」の読み方をカタカナで記す。

漢字仮名交じり現代表記で書くと「今日越えて」となる部分をひらがなで記す。

漢字仮名交じり現代表記で書くと「色は匂えど」となる部分をひらがなで記す。

口語訳（現代語訳）「無常の世にたとえられる奥山」にあたる部分をカタカナで記す。

口語訳（現代語訳）「浅い夢を見るように眼前の景象に惑わされることなく」にあたる部分をひらがなで記す。

ひらがなの元になった漢字で表記すると「恵比毛世寸」となる部分をひらがなで記す。

次の文章について後の問いに答えなさい。

今は昔、<sup>(a)</sup>比叡<sup>(b)</sup>の山に兎ありけり。僧たち、宵のつれづれに、

「いざ、かいもちひせむ。」

と言ひけるを、この兎、心よせに聞きけり。さりとして、し出ださむを待ちて、寝ざらむも、わるかりなむと思ひて、<sup>(c)</sup>片方に寄りて、寝たるよしにて、出で来るを待ちけるに、すでに、<sup>(d)</sup>し出だしたるさまにて、ひしめき合ひたり。

この兎、さだめておどろかさむずらむと待ちぬたるに、僧の、

「ものまつしさがらはむ。おどろかせたまへ。」

と言ふを、うれしとは思へども、ただ一度にいらへむも、待ちけるかともぞ思ふとて、いま一声呼ばれていらへむと、念じて寝たるほどに、

「や、な起こしたてまつりぞ。幼き人は寝入りたまひにけり。」

と言ふ声のしければ、あなわびしと思ひて、いま一度、起こせかしと思ひ寝に聞けば、<sup>(f)</sup>ひしひしとただ食ひに食ふ音のしければ、すべなくて、<sup>(g)</sup>無期の後に、

「えい。」

といらへたりければ、僧たち、笑ふこと、限りなし。

問一、――部<sup>(h)</sup>の読み方を現代仮名遣いで、ひらがなで記しなさい。

問二、――部「ものまつしさがらはむ」について、（１）口語訳しなさい。（ひらがな４文字）（２）「まつし」を漢字に直しなさい。

問三、次の文章を傍線注釈しなさい。

【注意】

- ・解答欄に記すこと。
- ・口語訳が載っている場合はその口語訳にしたがつて傍線注釈すること。
- ・解答欄に載せてある文中のスペースは単語の句切りである。そこに注意して線を引くこと。

今は昔、比叡の山に兎ありけり。

いざ、かいもちひせむ。

寝たるよしにて、出で来るを待ちけるに待ちけるかともぞ思ふとて

いま一度、起こせかしと思ひ寝に聞けば

いろはうたには暗号が隠されていると言われている。その暗号を説明しなさい。